

2016/6/1

しろひげ@Kurobane です。

6月になりました。

6月の声を聞くと、外来の患者さんたちの間でも、テレビのキャスターたちも、「もう六月！ 半分ですね」というあいさつが多くなります。

相槌を打ちながら、1年12か月のうち、祝祭日のない、雨のイメージの強い恵まれない月がまたやって来たことを実感します。

確か、中間テストでしめつけられるのも、この頃でした。

しかし、木々や草々の蒼をたっぷり吸った雨の匂いと、深い藍色のあじさいがつくる、思索的な世界が私は大好きです。

私が関わっている団体、「茨木のり子 六月の会」の主役が、宮崎のり子として大阪に生まれたのも、この月12日でした。

オバマ大統領の広島での、格調の高い、歴史的な演説を聴きながら、茨木のり子と生前、交流のあった女性詩人の作品をふと思い出しました。

大仰な語りでなく、原爆の犠牲になった人々が奪われた日常と、その後の悲惨さにまで言及していたからです。

歩きはじめたばかりの坊やは
歩くことで しあわせ

歌を覚えたての子どもは
うたうことで しあわせ

ミシンを習いたての娘は
ミシンをまわすことだけでしあわせ
そんな身近なしあわせを
忘れがちなおとなたち
でも こころの傷を
なおしてくれるのは
これら 小さな
小さな しあわせ

昭和 35 年(1960)、世の中がいわゆる六十年安保で大きく揺れていたころ、難解な現代詩でない平明な言葉で、主婦であり母親である詩人・高田敏子が、「朝日新聞」の家庭欄に毎週寄せた詩のひとつ、「しあわせ」です。

非日常が日常になってしまい、そこから抜け出せぬ大勢の人々が、世界各地に(もちろん熊本にも)いる現代、彼らに思いをよせ、日常からふとした時に見出す小さな喜びや悲しみにこそ、「しあわせ」があることを深く心に刻み込ませます。

そんな「しあわせ」を奪う、理不尽な暴力や核を再び生んではならないという点で、オバマ大統領の演説も高田敏子の詩も全く同じなのでしょう。

黒羽根整形外科
黒羽根洋司